

屋内でも要注意！

【低体温症による救急統計について】

寒さが本格化することで、低体温症のリスクが高まることが予想されます。

低体温症とは、何らかの原因により身体が冷却されたこと等により体温が低下し、正常な身体の機能が保てなくなる症状を言います。

気温などの環境要因のほか、年齢や既往の有無等が影響し発症することが多く、低体温症リスクの認識したうえでの予防が重要です。

本組合管内では、過去10年間（2013年から2022年まで）に低体温症により377人が救急搬送されています。搬送された方の8割以上（84.9%）が「高齢者（65歳以上）」で、また7割以上（74.8%）は「屋内」での発症と推測される状況でした。

このような低体温症による事故防止を図るため、以下のとおり救急統計をとりまとめましたのでお知らせします。

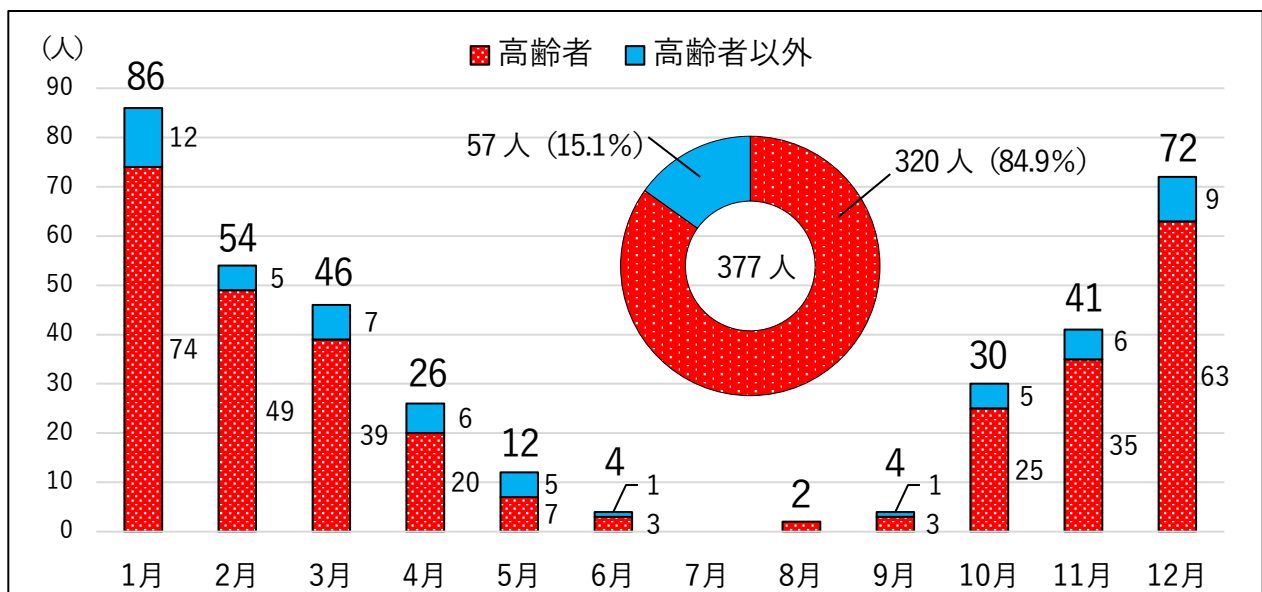
※ 数値は郡山地方広域消防組合管内における過去10年間（2013年から2022年まで）の数値。

※ 小数点を含むものは、小数第二位を四捨五入した数値。

■ 月別の救急搬送人員

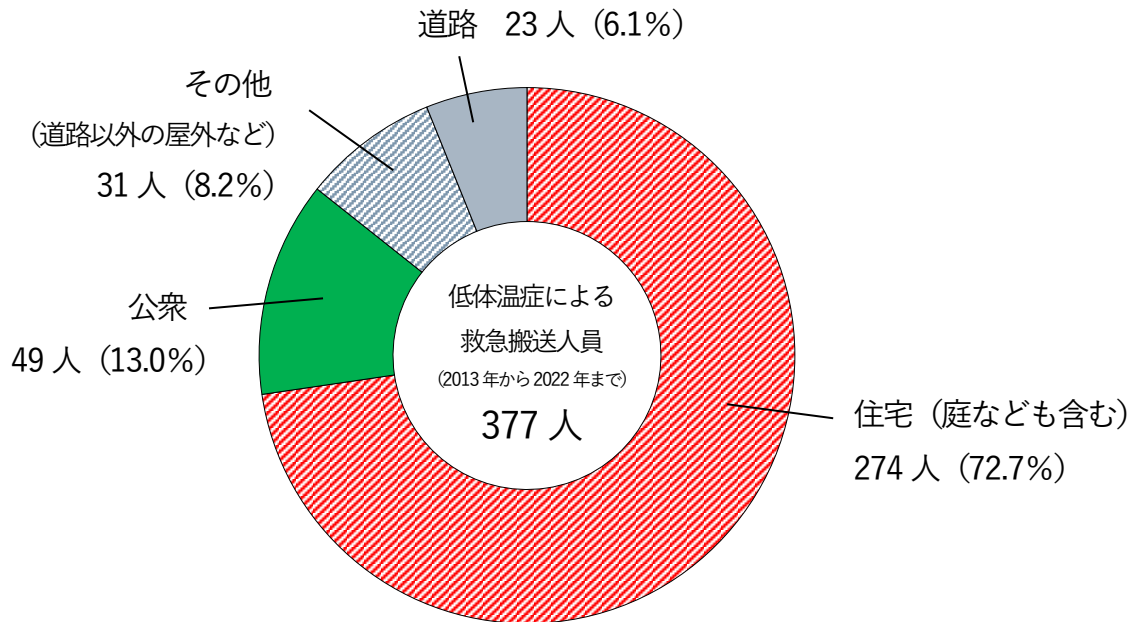
救急搬送人員を月別にみると、「1月」が86人（22.8%）で最も多く、次いで「12月」が72人（19.1%）、「2月」が54人（14.3%）と続き、気温が低い季節に多く搬送されていることが分かります。

また、救急搬送人員を「高齢者」と「高齢者以外」に分類すると、搬送人員が少ない夏を除き「高齢者」が圧倒的に多く、総数で比較すると「高齢者」が84.9%を占めています。



■ 発生場所別の救急搬送人員

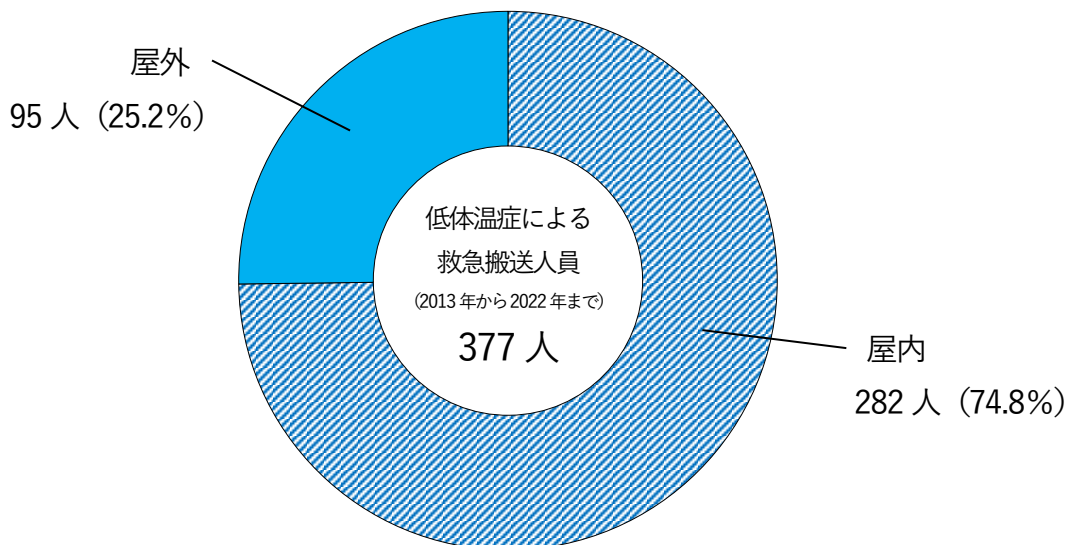
救急搬送人員を発生場所別にみると、「住宅（庭などを含む）」が274人（72.7%）で最も多く、次いで「公衆」が49人（13.0%）、「その他」が31人（8.2%）、「道路」が23人（6.1%）と続きます。



■ 発生場所の屋内外別の救急搬送人員

救急搬送人員を発生場所の屋内外別でみると、「屋内」が282人（74.8%）、「屋外」が95人（25.2%）となります。

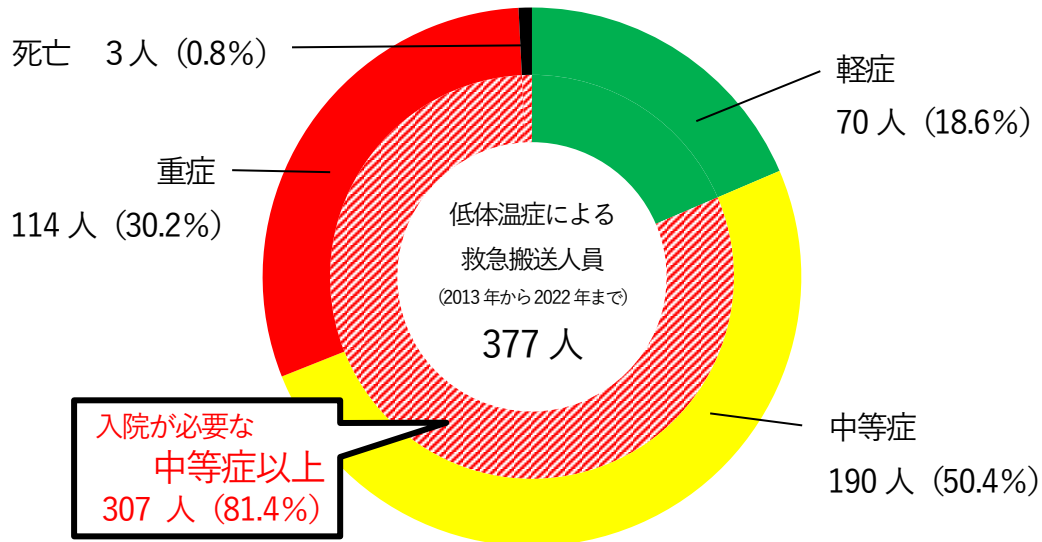
条件によっては、屋内・屋外関係なく低体温症を発症する可能性があることが分かります。



■ 傷病程度別の搬送人員

救急搬送人員を傷病程度別にみると、「中等症」が最も多く 190 人 (50.4%)、次いで「重症」が 114 人 (30.2%)、「軽症」が 70 人 (18.6%) と続きます。

入院が必要な「中等症」以上で 81.4% を占めています。



■ 救急搬送の事例

- ◇ 訪問介護職員が一人暮らしの 80 代男性宅を訪れたところ、居間で意識レベルが低下した男性を発見し救急要請となった。(1月)
- ◇ 70 代の女性が屋外を歩行中、凍結路面で転倒し自力で動けなくなり時間が経過。通りがかりの付近住人が発見し救急要請となった。(12月)
- ◇ 60 代の女性が自宅の雪かきをしていたところ、意識が朦朧とし急な震えを呈したため救急要請となった。(2月)
- ◇ 60 代の男性が自家用車内でエンジン停止の状態では仮眠をとっていたところ意識レベルが低下、通りがかりの住民により救急要請となった事例。(3月)
- ◇ 50 代の男性が居酒屋で飲酒後、徒歩で帰宅途中に泥酔し路上で眠り込んでいたところ、通りがかりの住民が発見し救急要請となった事例。(1月)
- ◇ 40 代の男性が湖上(ボート)で釣りをしていたところ、ボートが転覆し救助要請となった事例。(11月)